

〈ひねくれ〉の語り

—村上春樹「カンガルー通信」におけるねじれの構造—

山 根 由美恵

はじめに

村上春樹「カンガルー通信」（初出 一九八一・十一「新潮」）は、異様な男の話である。デパートの苦情係である「僕」が、却下された苦情の差出人にテープで吹き込んだ個人的な長いメッセージを送る。その中には「僕はあなたの手紙を家に持ち帰って以来、ずっとあなたと寝ることばかり考えています」といった性的なメッセージすら入る。村上独特の軽快な文体や随所に織り込まれる牧歌的な「カンガルー」の話などで醜化されているが、異様な人間の話であることは間違いない。

これまで、殆ど分析対象になったことのないテクストであるが、いくつかの指摘がなされている。川村湊氏は、「カンガルー」という「コトバとその周囲のイメージとをめぐる一見気まぐれな遍歴、“連想ゲーム”的なコトバの旅」に過ぎないと評し、森本隆子氏は、

「テーマの不在にこそテーマはあり、内容の空疎さに反比例して饒舌になる〈語りの形式〉に最大の特徴はある。その中に滑り込まされた『風の歌を聴け』『ノルウェイの森』でお馴染みの〈完璧／不完全、公平／不公平〉の対項をどう読み解くか」と問題提起している。

森本氏が的確に評するように、このテクストは「内容の空疎さに反比例して饒舌になる〈語りの形式〉」に特徴がある。ただ、この〈語りの形式〉にはただ単に内容のない話ばかりではなく「伝えたい内容」が描かれており、そこに「空疎」な話題が織り交ぜられるという、ある種の規則性が見られる。

本稿では、この規則性を持つ〈語りの形式〉を、心理学の視点から考察していきたい。主人公の語りの異様さは、次のような精神分裂病質者の語りと類似する点が多く、ここには、コミュニケーションを円滑に取る事が出来ない人間のねじれた姿が浮かびあがるので

ある。R. D. レインは「ひき裂かれた自己」の中で次のように記している。

精神分裂病質者 (schizoid) というのは、その人の体験の全体が、主として次のような二つの仕方では裂けている人間のことである。つまり第一に世界とのあいだに断層が、第二に自身自身とのあいだに亀裂が生じているのである。このような人間は、他者とへともにもある存在として生きることができないし、世界のなかでへくつろぐこともできない。それどころか、絶対的な孤独と孤立の中で自分を体験する。その上、自身自身をひとりの完全な人間としてではなく、さまざまな仕方、へ分裂したものとして体験する。³⁾

本稿では、主人公「僕」のへ語りの形式を明らかにし、その上で、「僕」を、世界とのあいだの断層、自分自身とのあいだに亀裂を生じている人間として捉えることを目的とする。そして、このような人間を描いたことの意味を、発表前後（70年後半から80年前半）の日本における心理学の状況と関連させつつ、考察していきたい。

*

尚、'02年に分裂症は統合失調症と名称を改められた。ここでは、発表当時のコンテキストを問題としたいので、当時の文献における

名称の通りに「分裂症」と書く事とする。また、ここで言う分裂病質者は精神病を指さない。前掲書、レインに記された訳注を掲げる（笠原嘉記）。

「分裂病質」とは分裂「病」のことではない。しかし、本書で示されるように分裂病質と分裂病の間には或る種の共通項の見出されることも事実である。（後略）

一言でいうと、分裂病質は性格異常の一型であり、分裂病は精神病である。理念上は性格異常とは、生物学的ならびに生活的由来にもとづいて、少なくとも人生の相当早い時期に形成される性格偏倚であり、精神病とは人生のある時点ないし時期から、いわば不連続的に生じるところの、周囲の人間にとつて了解できない人格変容をいい、その底に何らかの生物学的基盤の病変が想定されるものということになっている。

本稿でも、分裂病質、つまり性格異常という面の考察として進めていきたい。

一、へひねくれの語り―計算された不協和―

「カンガル―通信」は、苦情係の「僕」が、苦情の差出人であるへあなたへへの返事としてカセットテープにメッセージを録音して

いる話である。「僕」は、手紙という「文字」で自分の気持ちを書ける事が出来ない設定となっている。苦情の差出人への返答として、肉声をテープに吹き込むこと自体、奇妙な行動であり、その内容も半分以上が無意味な話題である。その点が、「ゴトバの旅」、「テープの不在」との評価となり、これまであまり取り上げられなかった理由でもある。

しかし、内容を整理してみると、「伝えたい内容」が描かれており、その前に「空疎」な話題が織り交ぜられている。そして、この「伝えたい内容」の前に、「空疎な話題」が置かれる話形が繰り返される構成となっている。その構成を次に示す。数字は便宜的に付け、「伝えたい内容」の部分をゴシック体太字とした。

1、動物園のカンガルーの話―へあなたへに手紙を出したくなった

2、自己紹介―「僕」はデバートの苦情係

・〈あなた〉の苦情は却下された

・手紙を書くこととしたが書けない

―カンガルーを見て啓示を得る

〈あなた〉へのメッセージをテープに吹き込む

3、テープをへカンガルー通信と名づける

・ノックの確認

・UVメーター(テープレコーダーの描写)

・エジプトの砂男(「僕」の想像の話)

4、〈あなた〉の苦情の手紙について

・「僕」の感動―その文章の中に〈あなた〉がいない

・セックスについて―〈あなた〉と寝ることはかり考える

5、「僕自身」について

・カンガルーの生態(妊娠・育児)について

・不公平さ―個性への不満(同時に二つの場所にいたい)

6、テープをプレイバックする

このテープに吹き込まれた話題において、主人公「僕」が受取手の〈あなた〉に伝えたい内容は、2、〈あなた〉の苦情が却下されたこと、手紙の代わりにテープに吹き込んだメッセージを送ることにしたこと、4、〈あなた〉の苦情の手紙に感動し、〈あなた〉と寝たいと思っていること、5、自分は「個」であることに不公平さを感じていることである。そしてそれらの前に「空疎な話題」が饒舌な語り口で語られている(「エジプトの砂男って知ってますか」、「聞いたことありますか? ないでしょう? だってこれ、僕が勝手に作った話なんだから。ははは」へ3「僕」の想像の話)。 「伝えたい内容」の前に、無意味な話題が置かれ、それが繰り返され、全体として無意味さ・空疎さが目立つという構成となっている。

苦情が却下された事実以降の「僕」の個人的な内容はかなり異様

である。恋人もいて定期的に寝てもいる「僕」ではあるが、彼女よりもただ単に苦情の手紙を送ってきた「あなた」の手紙に性的な欲望を感じる。ここでは、様々なコミュニケーション不能の状況が見て取れる。

山川健一氏は、一見、ドライな小説空間に、突然セックスの話が持ち出されて生じる「一瞬の歪み」を評価し、主人公たちのささやかな反逆と捉えている。この「歪み」は規則性のある構成として読み解け、「歪み」はテキスト全体に及ぶことが見えてくる。

*

ところで、前置きという言語活動は、そう珍しいものではない。例えば、言いにくい用件を伝える時や依頼の場において、単刀直入に言わず、前置きをおくことは多い。言語学における語用論では「ボライトネス」の問題と定義づけられている。

ボライトネスはある文化の「丁寧な社会的行動」、つまり、礼儀に見られるような固定化された概念として取り扱うことができる。ある文化の社会的相互行為に見られる、丁寧な振る舞いの一般原則を逐一列挙することも可能である。例えば、気配り、寛大さ、控えめ、思いやりといった原則である。相互行為に従事する会話者たちは、そのような規範・原則が社会のすみずみまで浸透していることを頭の片隅で意識していると想定し

ていいだろう。しかし、相互行為の内部にあつては、そういった原則以上に微妙なボライトネスの原理が作動している。このことを説明するためには、顔という概念が必要となってくる。

専門用語としての「顔」(face)とは人々が持つ社会的自画像のことである。(中略)つまり、だれもが有し、かつ、それを他者に認めるよう要請する社会的自己意識のことである。それゆえ、相互作用におけるボライトネス (Politeness) とは他者の顔を尊重する手立て、と定義することができる。

「ボライトネス」は、「丁寧な社会的行動」、「他者の顔を尊重する手立て」として、相手とのコミュニケーションを円滑に進めるため、依頼などの場面で用いられる社会行動である。相手に労を強いることを要求する「依頼」に際し、「今時間がありますか?」、「忙しい?」といった前置き、心理的な配慮を行うことで、その後の本題である「依頼」を円滑に進めるのである。

対して、「カンガル通信」は、「僕」の一人語りで、かつ受取手の「あなた」への心理的な配慮といった面で正反対の性格を有している。ここで行われる前置きは、あまりにも中身の無い空虚な話(僕の想像の話や脈絡のないカンガルなど)なので、それが挿入されることで、かえって聴き手(または読者)の心を害すように感じられる。そのために、「伝えたい内容」さえも無意味に感じられ

てしまうという、ぶちこわしの語りがなされている。このように、作家は、シニールさが際立つ構成という戦略的な（語りの形式）によって、異様な人間の語りを描き出しているのである。

このような（語りの形式）を、ピンスワンガーは次のように定義している。彼は分裂病者の特徴として、「思いがり」「ひねくれ」「わざとらしさ」という三形態があると述べている。その中の、「ひねくれ」の特徴を次に掲げる。

ひねくれとしての現存在が手許存在としての存在者に自らを出
会わせる仕方は、捻れと歪みの仕方であると要約的に言うこと
ができる。ここからひねくれの世界性は、捻れと歪みの世界と
して、そこにおいてわれわれが現存在をひねくれとして理解し
なければならぬような「精神」、つまり捻れと歪みの精神と
して特徴づけられる。

ひねくれとしての現存在は、われわれがみてきたように、境界と
しての乗り越えられない壁を自らの前に建てることはなく、む
しろここでは現存在の歴史的運動は、何ひとつ真つ直ぐには進
まず、すべてがねじれて進むということによって停止している。

ひねくれが、世界的な指示連関の全体の捻れ（*Quere*）あるい

は捻れること（*Verdrehung*）という意味での、またその限り
では現存在の歴史的運動性の立ち往生という意味での世界投企
による現存在の失敗として示された（後略）。

すなわち、「ひねくれ」を特質とする分裂病者は、相手に自分自
身を伝える時に「捻れ」「歪み」という方法を探る。これまでに見
てきたように、「伝えたい内容」の前に「空疎な話題」が置かれる
語りの形式を、自己の表現に際し、ストレートに表すことが出来な
い、捻れた、歪んだ形で表れる人間の語りという意味として、へひ
ねくれの語りと名付けてみたい。

二、〈ひねくれ〉の語りの内実

— ねじれた「僕」の発現 —

このような構成・へひねくれの語りによって、伝えたい内容は
無意味化されているわけだが、その内容を検討していくと、ここに
は語りだけではなく、存在が「ねじれた形としての僕」が浮かび上
がってくる。レインの言う精神分裂病者の特徴が現れてくるので
ある。

「僕」はへあなたへの苦情が却下されたことについて、「何度も何
度もあなたに手紙を書こうとした」が、「浮かんでくる言葉はいつ
も見当違いなものばかり」で、返事を下さないことにした。「不完

全な手紙を出すくらいなら何も出さない方がまし」、「完璧じゃないメッセージなんて、出鱈目な時刻表みたいなもん」といった、言葉・文章によるコミュニケーションが不可能であり、不完全なものを変えたくないという、コミュニケーション断絶の意志がある。

しかし、カンガルーを見ることで啓示を得る（今朝、カンガルーの柵の前で、僕は36の偶然の集積を経て、ひとつの啓示を得たのです。つまり大いなる不完全さ、ということです」傍点原文にあり、以下同様）。ここで言う「大いなる不完全さ」とは、「誰かが誰かを結果的に許すということかもしれません。僕がカンガルーを許し、カンガルーがあなたを許し、あなたが僕を許す——例えばこういうことです」というような、不完全さを許し合う関係である。このように、「僕」と「あなた」の間にカンガルーが挟まることが、このテキストの特徴である。つまり、「僕」は「あなた」と直接の関係が持てない、何かが挟まらないと人間関係が作れない人間という人物像が浮かび上がってくる。

ここでは、不完全なメッセージならば伝えないという断絶の段階から、不完全であってもコミュニケーションを取ろうとする意志へと変化する過程が見て取れる。他者との意志疎通への過程として一歩進んだように見えるが、あくまで「文章」は使わない。

文章を書くことはもうあきらめました。どうやってもうまく

いかないのです。例えば僕が「偶然」という字を書く。しかしこの「偶然」という字体からあなたが感じるものは、僕が同じ字体から感じるものとは全く別のもの——あるいは逆のもの——かもしれません。これはとても不公平じゃないか、と僕は思うのです。僕はパンツまで脱いでいるのに、あなたはブラウスのボタンを三つしかはずしてない、これは実に不公平な出来事です。

だから僕はカセット・テープを買い込んで、あなたへの手紙を直接吹き込むことにしました。

「僕」は「例えば僕が「偶然」という字を書く。しかしこの「偶然」という字体からあなたが感じるものは、僕が同じ字体から感じるものとは全く別のもの——あるいは逆のもの——かもしれません」という感じ方で文字に対しての不審を述べている。これは書き手と受け手のシニフィアンとシニフィエの分裂が起る状況を想起していることと捉えることができるだろう。文字に信用がおけない「僕」は、不完全さを理解しつつ、テープに発話を吹き込むというパロールによって、「あなた」へ向けた個人的なメッセージを伝えようとする。記号への不審（シニフィアンとシニフィエの分裂）が、音声言語によつて解消されるかどうかは、厳密に考えると不明である。また、このテキストは、テープに吹き込まれた人間の発話が記されている

ことが特徴で、結局は文字言語として記されていることには変わりない。この問題に関しては、後で触れることとする。

ここから、へあなたへ向けた個人的な内容が始まるのであるが、その語りはちぐはぐで、より奇矯さを増してくる。このテープで最も伝えたい内容は、へあなたへの性的欲望と、そこから導き出された、「個」であることに不公平さを感じていることであった。

主人公「僕」には恋人がおり、その関係に満足してはいる。しかし、「僕は彼女についてはあまり深く考えないように努力しています。結婚する気もありません。もし結婚しなきゃばきつと僕は彼女について深く考え始めるだろうし、そうなった時にうまくやっつけていけるといふ自信はまるでないのです」と一番親密な相手であるはずの恋人とのコミュニケーションが取れないことを告白している。他人との真の交流ができていない人間であることがわかる。文字を信用できない「僕」は、人間も信用ができていないのである。

この傾向は、「僕」のへあなたの手紙への偏愛からも窺える。

句読点だけではありません。あなたの手紙の全ての部分が——インクのしみひとつに到るまで——僕を挑発し、揺り動かすのです。

何故か？

結局のところ、その文章の中にあなたがいないからです。も

ちろんストーリーはあります。一人の女の子が——あるいは女性——が——間違えてレコードを買ってしまった。そのレコードにはどうも違う曲が入っているような気がしたのだけれど、レコードそのものが間違っていることに彼女が気づくのちよūd一週間かかる。売り場の女の子は交換してくれない。そこで苦情の手紙を書く。これがストーリーです。

僕はそのストーリーを理解するまでに、あなたの手紙を三度読みなおさねばなりませんでした。なぜならあなたの手紙は、我々のもとに寄せられる他のどんな苦情の手紙ともまるつきり違っていたからです。はつきり言えば、あなたの手紙の中には苦情さえ存在しないのです。感情も存在しません。ストーリー——だけが——存在しています。

手紙の中にへあなたがいまいというところが、「僕を挑発し、揺り動かす」。そして「僕はあなたの手紙を家に持ち帰って以来、ずっとあなたと寝ることはかり考え、ベッドの横にへあなたがいまいという妄想を語るが、「僕」は「目を閉じたままじつと寝たふりをしていきます。僕にはあなたを見ることはできないのです」と一つの制約を設けている。「僕」はへあなたの人間性が見えないことに執着し、「僕を挑発し、揺り動か」される。そして、性的欲望を感じるへあなたとの妄想にも、「あなたを見ることできない」

にもかかわらず満足している。つまり、「僕」という人間は、人間性を抜きにした状況において、人と交流ができるようである。

ここで「僕」の人物像を整理しておきたい。「僕」は何かが挟まれないと人間関係を形成できない。文字に信用をおいていない。恋人であるはずの彼女と結婚を考へることができず、見ず知らずの相手のへあなたへ、人間性が見えない相手に性的欲望を感じる。その上、その妄想では、へあなたへの顔を見る事ができなくても満足する。こういった、円滑にコミュニケーションを取る事が出来ない人物としての「僕」が見えてくる。

三、分裂願望にみる分裂気質——存在の孤独——

「僕」の性的欲望の告白は、テキストの中心とはならず、この話題の前後から、「僕」が「自分自身」というものを話す展開へとシフトチェンジしていく。「僕はどうも自分自身についてしゃべりすぎるようです。でも考へてみればこれは仕方ないですよ。だって僕はあなたのことを何ひとつ知らないんだから」、「もう少し僕自身についてしゃべらせて下さい」、「僕自身についてしゃべります」、「こういう風に——自分自身を正直にしゃべるということに——僕は慣れてないんです」。

何度も繰り返される自身が語ることへのエクスキューズ。これらで「空疎な内容」と「伝えたい内容」が繰り返されてきたが、この

合理的ではないへひねくれへの語りを通じて、結果的に「僕」は自分自身を見つめている。

デリダは、「声は意識である」とし、独り言において「自分が話すのを聞くこと」を直接的に反復するとは、すなわち純粹な自己——触発をいかなる外面性の助けも借りずに再生する、ということである」と記している。テキストは、テープにメッセージを吹き込む男の一人語りという構図であるが、このメッセージは受け取り手がどのような反応をしたのか描かれていない。つまり、長い長い独り言が延々続いている物語である。この独り言は、語り続けることによって、「僕」のへあなたへの性的欲望を告白することよりも、自己を意識することの繰り返しが強くなっていく。テキストは、自分自身を見つめ直す語りへと移行していくのである。

ここで語られる「僕自身」とは何か。冒頭で引用したレインの二つの定義によりながら、①世界とのあいだの断層、②自分自身とのあいだの亀裂という側面を検討する。

僕は時々、個について——コタイのコです——考へるのがとても辛くなるんです。考へ始めると体がバラバラになっちゃう。そんな気がするんです。

……例えば電車に乗りますね。電車の中には何十人も人が乗っている。原則的に考へればこれはただの「乗客」です。青

山一丁目から赤坂見附まで運ばれる「乗客」です。ただね、時々そんな乗客の一人一人の存在がとても気になっちゃうことがあるんです。この人はいつたいいんだろう、あの人はいつたいいんだろう、どうして銀座線になって乗っているんだろう、つてね。するともう駄目なんです。気になりだすと止まらなくなるんです。あのサラリーマンはいまに額の両わきから禿げあがつてくるだろうとか、あの女の子の脛毛は少し濃すぎる、週に一度は剃っているんだろうとか、どうして向いに座った若い男はあんなに色のあわないネクタイをしめているんだろうとか、まあそんな具合です。そして最後には体がガタガタ震えてきて、電車から飛び下りてしまいたくなっちゃうんです。この前なんて——きつとあなたは笑うだろうけど——もうちよつとでドアの脇の非常停止ボタンを押してしまふところだったんですよ。

「僕」は個であることに不満を感じ、電車では、他人が気になり、「最後には体がガタガタ震えてきて、電車から飛び下りてしまいたくなっちゃうんです」というような、神経症的な感じ方で周りの世界との距離を感じている人間である。

これは、レインの言う「他者とへとも」ある存在として生きる事ができないし、世界のなかでへくつろぐこともできない。そ

れどころか、絶対的な孤独と孤立の中で自分を体験する」状態と言えよう。

僕は同時にふたつの場所にいたいのです。これが僕の唯一の希望です。それ以外には何も望みません。

しかし僕が僕自身であるという個性が、そんな僕の希望を邪魔しているのです。(中略)僕は恋人と寝ながらあなたと寝たいのです。僕は個でありながら、原則でありたいのです。

レインの定義は、精神分裂病質者の特徴であるが、同じように最終的に「僕」の語りは、分裂願望の告白となる。

ひとつだけ確認しておきたいのですが、僕はあなたという一人の女性に対して性的な欲望を抱いているわけではありません。さつきも言ったように、僕は僕自身でしかないという事実に対してとても腹を立てているのです。ひとつの個であるということ、これはおそろしく不愉快です。僕は奇数に対して我慢できないのです。だから個人であるあなたと寝てみたいとは思わないのです。

もしあなたがふたつに分割され、僕がふたつに分割され、そしてその四人でベッドを共にすることができたらどんなに素敵

でしょう。そう思いませんか？

「僕」は一つの個であることに不満を持ち、自らを分割したいと望んでいる。ここで、「個」であることに強い不満を持っていることは看過できない。アイデンティティが自己同一性と訳されるように、近代において個の確立とは、統一された自我の獲得であり、社会ではそれが求められてきた。「僕」の願望は、「僕が僕自身である」という個性が、そんな僕の希望を邪魔している、「ひとつの個である」ということ、これはおそらく不愉快」と述べるように、ただ一つである自分、という方向とは全く逆の方向を求めている。

小林正明氏は、「僕」の二つの場所に同時に存在したい」という願望に着目し、超自我へと締め上げるフロイト言説の体制からの逃走としての「共時的な複数性」と、その困難さを指摘している。近代という時代を超自我という強力な規制の装置として考えると、「僕」の願望はそこからの「逃走」としての面を持つと言える。

しかし、「僕」はへひねくれへの語りをする人間である。分裂願望や個への不満という点は、逆に自分自身への不満、自信のなさの表れと考える事ができるのではないだろうか。実際、「僕」はへひねくれへの語りを通して、自分自身の異様さを告白しながら、コミュニケーションを取ろうと模索してもいる。分裂したいと望みながらも人とのつながりを希求しているというねじれた姿があるのである。

ここまでのテープを、今プレイバックして聞きかえしてみました。正直に言つて、僕はとても不満足です。間違えてあしかを死なせてしまった水族館の飼育係みたいな気分です。だからこのテープをあなたに送つたものかどうか、僕としてもずいぶん悩みました。

送ることに決めた今でも、僕はまだ悩んでいます。

しかし何にせよ、僕は不完全さを志したのです。だからころよくそれに従いましょう。その不完全さを、あなたと四匹のカンガルーが支えていくくれるのです。

「僕」が最後に望むのは「不完全」ながらもへあなたへと繋がろうとすることである。「僕」はコミュニケーションを望んでいながらも、へひねくれへの語りをし、分裂したいと望んでしまう、ねじれた形でしか自分自身を表現することができない人間であることがわかる。「僕」は不完全な文章なら出さない方がましという考え方で、へあなたへの返事を断念しかけていたが、「カンガルー」というものを間に挟み込み、「不完全さ」を許し合うということで、へあなたへの繋がりを求める。ねじれた形ではあるが、他者へと繋がりたいという願望が見取れるのである。結末部「僕は不完全さを志したのです。だからころよくそれに従いましょう。その不完全さを、あなたと四匹のカンガルーが支えていくくれるのです」

には、(へひねくれ)の語りをし、^ス精神分裂病^イ質者のな特徴を備えつつ、ねじれた姿を告白する事で、相手へコミュニケーションを求め「僕」の祈りが込められている。

おわりに

ただ、この(へひねくれ)の語りは、あくまで作者が作った「歪み」である。そこには作者側の戦略が当然考えられる。

まず、時代状況について見てみると、「カンガルー通信」が発表された'81年前後、心理学ブームとでもいべき状況があった。小此木啓吾「モラトリアム人間の時代」(一九七八)における、モラトリアムという語は流行語となり、河合隼雄「昔話の深層」(一九七七)、岸田秀「ものぐさ精神分析」(一九七七)などが多くの雑誌で取り上げられ、一つのブームとなっていた。この状況を反映し、心理学に関する雑誌記事が'78-'81に一度、ピークを迎え、その後急速に伸びている。このような背景を考えた時、'81年という年は、一般の人間においても心理学への関心、精神分析的な視点が広まり始めた時期と考える事ができる。

精神分裂病学を概観すると、プロイラーから始まった精神分裂病学は、ビンズワンガー・ミンコフスキーの手で発展していく。特にビンズワンガーは、ハイデガーの影響下にある現存在分析を行い、後に大きな影響をもたらすバイオニアとして知られる。また、木村

敏、中井久夫、岸田秀「ものぐさ精神分析」においても引用されている。ビンズワンガー以後、サリヴァン・フロム・ライヒマン、レインが精神分裂病学を発展させていった。'70-'80年代の日本の精神分裂病学は、ビンズワンガー以降の彼らの影響下にあることは間違いない。

その後、'84年に発表された浅田彰「逃走論」において、(パラノヘスキゾ)という語が一般に爆発的に広まった。¹⁰浅田の論の根拠はドゥルーズIIガタリ「アンチ・オイディプス」「千のプラトー」や中井久夫「分裂病と人類」である。それまで一般的には認知が低かった概念(ヘスキゾ)が、'82年の「ドゥルーズ」特集や、'83年中井久夫「分裂病と人類」から浅田彰「逃走論」に至り、一般に認知されていくという流れがある。

こういった状況を踏まえると、'81年の「カンガルー通信」は、心理学への関心、精神分析的な視点が広まり始めた時期、ただし(ヘスキゾ)の爆発的な認知の前の段階で、^ス精神分裂病^イ質者の語りを描いたテクストと考えられる。時代と共鳴しつつ、先行している面を評価することができよう。

このような背景を押さえ、作者の戦略を考えていきたい。「カンガルー通信」の重要な特徴として、主人公「僕」がデパートで普通に働いているサラリーマンであることが挙げられる。

ここで、ドゥルーズIIガタリの次の記述を参考にしてみたい。

分裂者は、自分自身の独自の位置を決定する種々の様式を意のままに用いる。何故なら、かれは、何よりも、自分自身に特有な登録コードを自由に操作するものであるからである。この特有な登録コードは、社会的コードとは一致しないものであり、あるいはたとえ一致しても、それはその社会的コードをパロディ化するためでしかないといったものである。錯乱〔妄想〕するコードあるいは欲望するコードは、並はずれた流動性を示すものである。分裂症患者はひとつのコードから他のコードへと移行し、次々と提起される質問に応じてすばやく滑ってゆきながら、一切のコードをかきまぜてしまうのだ。¹¹

見てきたように、へひねくれの語りとは、「一切のコードをかきまぜてしまふ」語りである。70年代後半から、心理学・精神分析的な視点が広がり始め、そこにおいて精神疾患は一部の異常な人間にみられるものではなく、軽傷化され、一般化していった（「モラトリアム人間の時代」、「ものぐさ精神分析」など）。テキストは、「僕」という目立たない平凡な一個人の発話が「社会的コードをパロディ化」していく。これを第一義の特質として、作者が企図した点と考えることができよう。

しかし、「社会的コードをパロディ化」することのみが、テキストの本質ではない。語りが「僕」の性的欲望の発露から自分自身を

見つめるものへと変化していったことに顕著なように「僕」は不器用な形でコミュニケーションを取ろうと模索している人間である。テキストは、誰にでもこの「僕」のようなねじれた部分、コミュニケーションを取る事ができず苦しんでいる部分があることを想起させる。これを第二義の特質と考えたい。

「一切のコードをかきまぜてしまふ」へひねくれの語りは、「社会的コードをパロディ化」する脱構築の語りであり、平凡な一個人の存在の孤独を表す語りであったのである。極めて現代的な「個」の病を、一見奇妙ながらも内実は深いものとして描く作者の戦略を読み取ることができるのではないだろうか。

村上の心理学への接近は、同じ「中国行きのスロウ・ボート」所収の「土の中の彼女の小さな犬」にも見られる。ここでは「トラウマ」に焦点が当てられているが、「トラウマ」の不徹底ぶりに作者は否定的な評価を行っている。これらの繋がりについては、別稿で述べたい。

*

ところで、「カンガルー通信」は、アメリカのクノップ社で独自に編集された短編集『象の消滅』（一九九三）に採録されている。『象の消滅』は、このスタイルで全世界で翻訳されている、村上短編集のグローバル・スタンダードといえる存在である。「カンガルー通信」は、日本では殆ど無名であるが、世界的には、掲載されな

つた他の短編よりも「ハルキ・ムラカミ」の短編として認識されていると言えよう。

収録作品を選択したのは、クノップフ社副社長のゲイリー・フィスケットジョンであるが、ここにはアメリカ人にとって日常に潜む異常性と現代人の存在の孤独というモチーフが、より身近なテーマであったという理由が考えられる。日本よりもアメリカでこのテキストの価値が発見されたわけだが、80年前後の日本の状況と呼応し、かつ世界的に有効な視点を有したテキストとして、「カンガルー通信」は価値あるテキストと位置づけられるのである。

注

- *1 「書評」(「群像」一九八三・八)
- *2 「カンガルー通信」『村上春樹作品研究事典』(二〇〇一・六、鼎書房)
- *3 「ひき裂かれた自己」(一九七九・九、みすず書房)
- *4 「BOOKS」(「海」一九八三・八)
- *5 ジョージ・ユール 高司正夫訳「ことばと発話状況―語用論への招待―」(二〇〇〇・四、リール出版)
- *6 「思い上がり ひねくれ わざとらしさ 失敗した現存在の三形態」(一九九五・二、みすず書房)
- *7 「声と現象 フッサール現象学における記号の問題への序論」(一九七〇・十二、理想社)
- *8 「塔と海の彼方に」(「村上春樹・塔と海の彼方に」一九九八・十一、森話社)
- *9 「一九八一年前後における心理学の状況：『通史日本の心理学』(一九九七・十一、北大路書房)

*10 浅田彰「逃走論」(一九八四・三、筑摩書房、引用はちくま文庫、一九八六・十二)

ここでまず思い起こされるのが、人間にはパラノ型とスキゾ型の二つがある、という最近の説だ。パラノ型のは偏執型のこと、過去の全てを積分し統合して背負つてようなのをいう。たとえば、十億円もつてる吝嗇家が、あと十萬、あと五萬、と血眼になつてみるみたいな、ね。それに対し、スキゾ型のは分裂型で、そのつど時点ゼロで微分し差異化してつてようなのを言う。つねに「今」の状況を鋭敏に探りながら一瞬一瞬にすべてを賭けるキャンプラーなんか、その典型だ。(「逃走する文明」初出「ブルータス」一九八三・一/一・十五日号)

誰もが相手より少しも速く、少しも先へ進もうと、必死になつてゐる社会。各々が今まで蓄積してきた成果を後生大事に背に負いながら、さらに少しでも多く積み増そう、それによつて相手を出しぬこうと、血眼になつてゐる社会。これはいささか病的な社会だと言わなければならぬ。ドゥルーズ||ガタリになつて、このような社会で支配的な人間類型をパラノ型と呼び、スキゾ型の対極として位置付けることにしよう。(「スキゾ・カルチャーの到来」初出「月刊ペン」一九八三・四)

*11 「アンチ・オイディプス」(一九八六・五、河出書房新社)

*12 短編集「家の消滅」所収の作品は以下の通り。()内は日本版所収短編集名と発行年月。

- 1、「ねじまき鳥と火曜日の女たち」(「パン屋再襲撃」一九八六・四)
- 2、「パン屋再襲撃」(「パン屋再襲撃」)
- 3、「カンガルー通信」(「中国行きのスロウ・ボート」一九八三・五)
- 4、「四月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会う、ことについて」(「カンガルー日和」一九八三・九)

- 5、「眠り」(「TVビープル」一九九〇・一)
- 6、「ローマ帝国の崩壊・二八八一年のインディアン蜂起・ヒットラーのポ
ランド侵入・そして強風世界」(「パン屋再襲撃」)
- 7、「レーダーホーゼン」(「回転木馬のデッド・ヒート」一九八五・十)
- 8、「納屋を焼く」(「蝿・納屋を焼く・その他の短編」一九八四・七)
- 9、「緑色の獣」(「レキシントンの幽霊」一九九六・十二)
- 10、「ファミリー・アフエア」(「パン屋再襲撃」)
- 11、「窓」(「原題「パート・バカラックはお好き?」「カンガルー日和」
「TVビープル」(「TVビープル」)
- 12、「中国行きのスロウ・ボート」(「中国行きのスロウ・ボート」)
- 13、「踊る小人」(「蝿・納屋を焼く・その他の短編」)
- 14、「沈黙」(「レキシントンの幽霊」)
- 15、「沈黙」(「レキシントンの幽霊」)
- 16、「象の消滅」(「パン屋再襲撃」)
- 17、「象の消滅」(「パン屋再襲撃」)

—やまね・ゆみえ、鈴峯女子短期大学非常勤講師—